

本紹介『儂い羊たちの祝宴 米澤穂信』

鈴木真帆

私が最近読んだ本の中でお勧めの本を紹介したいと思います。米澤穂信の『儂い羊たちの祝宴』という短編推理小説です。この本は2008年に新潮社から刊行されたミステリー小説です。「ラスト一行の衝撃」に徹底的にこだわりぬいた5編の短編集です。

それぞれの短編は違う話ですがすべての物語に共通点があります。5つの短編は、夢想家のお嬢様たちの集う「バベルの会」の会員たちそれぞれが引き起こす残酷な事件の真相について書かれています。

私がこの短編集の中で一番好きな物語は、「北の館の罪人」です。紡績と製菓業で財を成した六綱家の前当主の愛人として生まれた主人公内名あまりは母の死後、六綱家に身を寄せます。住み込みでも何でもいいからここに置いて欲しいというあまりに、現当主でありあまりの兄である光次は、北の館を与えます。北の館には、あまりだけではなくすでに光次の兄である早太郎が住んでいました。あまりは光次に北の館で早太郎の世話と監視をするようにと言います。早太郎の世話をするうちに、北の館と六綱家のいわくについて知り、しばらくしてからは早太郎から不可解な買い物を頼まれます。早太郎に言われるままにビネガーや画鋸、糸鋸、卵、牛の血などを調達するあまり。早太郎の目的はわかりませんが、日に日にやせ細り弱っていきます。最後には、亡くなることになります。死の間際に早太郎が何をしていたか明かします。早太郎は、兄弟たちのために絵を描いていました。絵の具ではなく、その原材料から調達することにしたのです。残された絵は、色が青と紫のみですが、だんだんと赤くなるという工夫がなされていました。「殺人者は赤い手をしている。」このように早太郎はあまりに話していました。実は、早太郎を弱らせて殺したのはあまりでした。料理に少しずつ砒素を混ぜていたのです。理由は、財産分与のときの自分の取り分を少しでも多くするため。しかしこのあまりの計画は、家族に見破られます。早太郎はあまりに殺されることをわかっていたのです。残された絵の赤くなる細工で、あまりの手だけが赤くなるように細工していたのです。「殺人者は赤い手をしている。」からです。

この物語の前半ではあまりは早太郎にとっても親身になって接しているように書かれています。実は遺産目当てでしかないという結末。それだけで終わるのではなく、早太郎の赤くなる細工の絵による無言の告発によりあまりが絶望するという二段階のラストでぞっとさせられました。

このほかの短編集もこのようにラストでぞっとさせられる作品です。

この短編集の好きなところは、ストーリー性はもちろんですが、言葉の使い方です。良家のお嬢様らしい丁寧な言葉遣いで、ぞっとするような残酷な結末が書かれています。そのギャップが怖いけれど、美しいと思います。読んでみてください。